被災者の意思決定に自分を重ね、手のひらサイズの想像力を養うワークショップ

# 連なって、ふくしま

上智大学総合人間科学部教育学科１年
黒田夢奈

# 今の私を突き動かすのは、ふくしまでの人との出会い、そして対話。

**高校２年生：**福島県観光物産交流協会のホープツーリズムに参加。元東京電力社員・現東京電力社員をはじめとした様々な形で復興に携わる人々との対話の中で幾度も出てきた「教訓」という言葉に違和感を覚え「教訓とはなにか」に関心を持つように。今も忘れられない言葉は「福島に来るのは人の痛みを知るためではない。人生をより豊かにするため」

**高校３年生：**多様な教訓継承のあり方を知るために長崎県のオンラインアカデミーに参加。「Hibakusha Journy」という意思決定型平和学習プログラムを考案。長崎市役所で発表し、長崎県内の小学校と地球市民フェスで実施。

**大学１年生：**教訓継承の手段としての教育を学ぶために教育学科に進学。福島県に思いを馳せ続けている。

**「福島、その先の環境へ。」ツアーへの参加**

**私たち、そして未来の世代に...**

**除去土壌問題は誰もが当事者（≠当事者“意識”）であると伝えたい**

**被災者という大きなくくりの細部にある、個への想像力を持ってほしい**

２万2000×１ではなく、１×２万2000という捉え方

# 長崎のいまは、福島のこれから

## ①人類史において重要な出来事

【長崎県と福島県の共通点：人類史の観点から】
長崎県は、人類史上、2発目の原子爆弾が投下された地。福島県は、人類史上経験のない地震・津波・原発事故・風評被害を含む複合災害が発生した地。
双方とも、経験した人々が二度と起こってほしくないと願う出来事が起こった地である。
2025年は原爆投下から80年の大きな節目の年である。
一方で、厚生労働省によると現在の被爆者の平均年齢は85.58歳であり高齢化によって、目の前の被爆者から体験を聞くことのできる機会は減少している。

## ②教訓継承

【問題意識：被災者なき世界を見据えて】
こうした現状から、長崎県は「被爆者なき時代」を見据え、世代を超えた教訓継承活動*が行われている。教訓継承者不足の問題は、福島県もいずれ直面することは間違いない。しかし、人々の興味関心にはリソースがある。そのため、「被災者なき世界」を見据え、現在行われている語り部講話やホープツーリズムを継続することはもちろん、福島に来ることが難しい人々に対しても除去土壌問題に関心を持つ機会を提供することが重要ではないだろうか。*家族・交流証言、高校生平和大使、長崎ユース代表団など

→ いつでもどこでも「原発被災者として生きるとはどういうことなのか？」について考えられるＷＳの提案

# 被災者の意思決定に自分を重ね、手のひらサイズの想像力を養うワークショップ

## WSタイトル：連なって、ふくしま

**連なる＝切れずに続くこと。**

**概要**

「原発被災者として生きるとはどういうことなのか？」原発被災者が直面してきた様々な差別や震災以降も抱える生きづらさについて、様々な証言を組み合わせた1つのストーリーを用いてその場に集まった皆さんと共に考えるワークショップ

**目的**

被災者が下してきた、あるいは強いられてきた決断に連なって、その場に集まった皆さんと一緒に考えることで、原発被災者として生きることへの想像力を広げる

参考：長崎での実践例

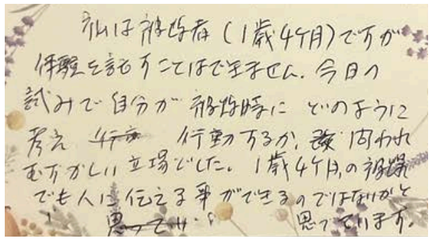
WSの様子

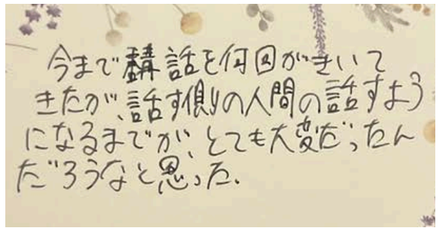
大学生・若者・親子・留学生・被爆者等の
様々な属性の方々が参加してくれました

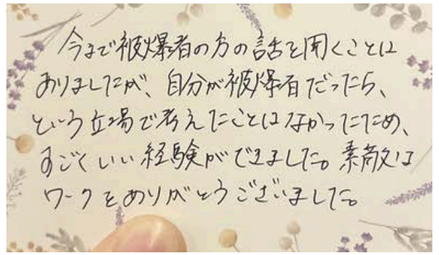
実際に参加者に問うた問い

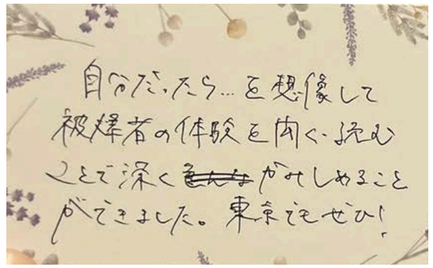
「あなただったら自分の被爆体験を
誰かに伝えたいと思いますか？」

感想（抜粋）


私は被爆者（1歳4ヶ月）ですが体験を話すことはできません。今日の試みで自分が被爆時にどのように考え行動するか、迫われむずかしい立場でした。1歳4ヶ月の被爆でも人に伝えることができるのではないかと思ってます。


今まで聲話を何回かきいてきたが、話す側の人間の話すようになるまでが、とても大変だったんだろうなと思った。

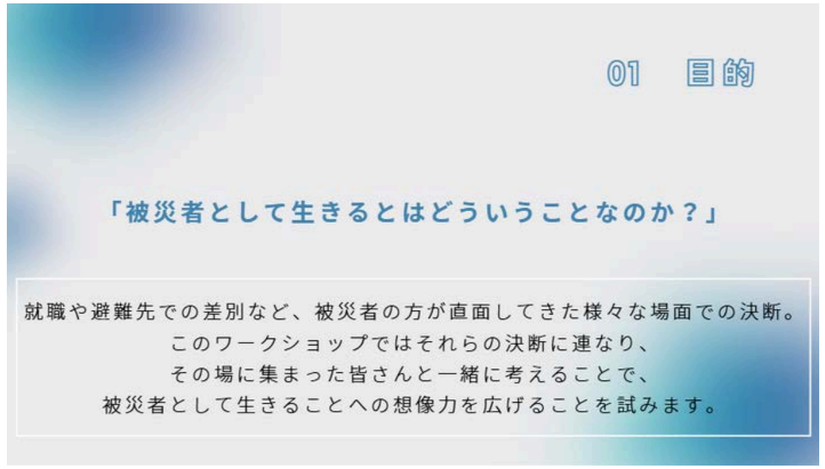

今まで被爆者の方の話を聞くことはありましたが、自分が被爆者だったら、という立場で考えたことはなかったため、すごくいい経験ができました。素敵なワークをありがとうございました。


自分だったら…を想像して被爆者の体験を聞く・読むことで深く~~[illegible]~~がみしゃることができました。東京でもぜひ！

# 「復興・希望ある未来」を創造していくためのWSの提案：流れの説明

①目的の説明

②グループ決め＆アイスブレイク



**①目的の説明**

：参加者に対して行ってもらうことを分かり易い言葉と多すぎない文章量で説明する。

**②グループ決め＆アイスブレイク**

：グループは様々な世代が交流できるようWS実施者が決定。アイスブレイクの目的は、グループ内の親睦を深めることに加え、**WS実施者と参加者の共通の関心を見出し信頼関係を築くこと**である。出されたお題に対し、「せーの」という掛け声とともにグループで同じ答える全員一致ゲームを行う。お題は、実施する土地に関連したもの（有名人や有名なお菓子屋さん）を提示することで、**地元の人々とWS実施者**（地元ではない人を想定）**の心理的障壁を減らし、交流を生む。**

# 「復興・希望ある未来」を創造していくためのWSの提案：流れの説明

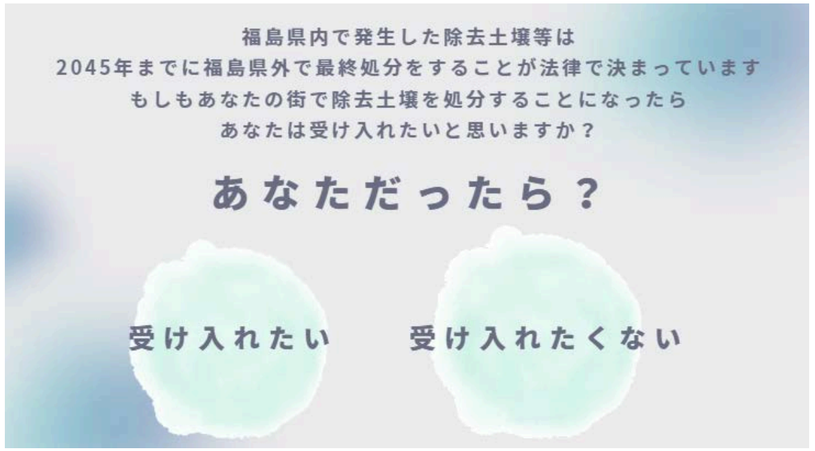
## ③本編：導入

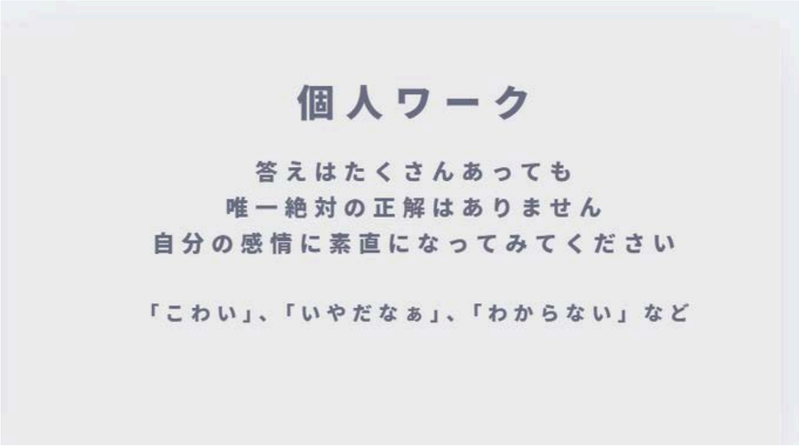
**③本編**

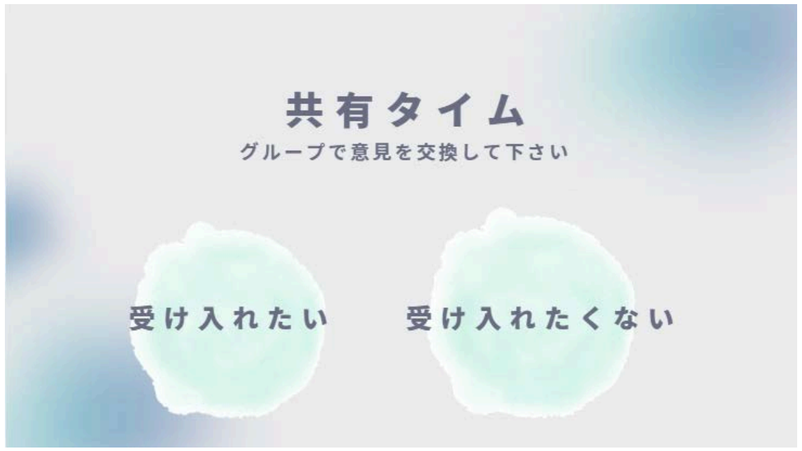
：本WSの最大の特徴は「自分だったらどうするか」という視点で東日本大震災を認識することである。そのため、参加者には**「いつ、誰として、誰と共に生きているのか」**という簡単な設定を与える。これらをWS参加者の共通言語として与えることで、のちに行うグループワークで話す内容がより具体的なものとなるだろう。また、唐突に「東日本大震災の発生」の場面に移るのではなく、「東日本大震災以前の福島県の日常」を提示することで、福島県の産業や食に対する簡単な事前知識を与える。そして、このパートを挿入することによって「東日本大震災前後の比較」という視点が生じ、**東日本大震災が奪った被災者の日常生活**の大きさへの理解を深めることや、**「被災者」というレッテルによって見えずらくなっている彼らの人生の明るい側面**（幸せ、楽しい）に目を向けてもらいたい。

# 「復興・希望ある未来」を創造していくためのWSの提案：流れの説明

## ③本編：問いの投げかけ→個人で考える→グループ共有→全体共有




**③本編**

：本資料では「**もしもあなたの街で除去土壌を処分することになったら、あなたは受け入れたいと思いますか？**」という問いのみを紹介しているが、この問いはいくつか提示する問のうち最後に提示する。この問いの前には、震災発生後の時系列に沿って「避難所での生活について」「県外の避難先で避難者であることを伝えるか」「帰還するか、移住するか」等の決断を参加者とともに考え、自分の意見を伝えあう。また、意見交換をした後に「ある被災者の選択」と称した実際の被災者がとった行動を紹介し、自身の意見と実際の被災者の選択を比較し、問いに対する様々な見方を提供する。さらに、参加者に選択肢を与え、問うていながらも「**選択することさえできなかった**」というスライドを提示することで、震災の存在感や生々しさを参加者に伝える。

# さいごに

「自分だったら」の視点を持つ状態で
被災者が迫られてきた様々な決断について、だれかと一緒に意思決定をすることで

**除去土壌問題は誰もが当事者（≠当事者“意識”）であると伝えたい**
**被災者という大きなくくりの細部に確かに存在する個を想像してほしい**

心理的安全性　想像する、連なる　意思決定　伝え合う

## 参考文献


・環境省「県外最終処分に向けた取り組み」（https://josen.env.go.jp/chukanchozou/facility/effort/）
・群馬司法書士会「群馬司法書士新聞震災対策特別号：県外避難者の悩み～迫られる決断、帰還か移住か～」（https://gunma-shihoshoshi.or.jp/cms/wp-content/uploads/2015/01/no27.pdf）
・福島県弁護士会「東京電力福島第一原子力発電所事故により避難している福島県民に対する偏見や差別、とりわけ県外に避難している子どもたちに対する偏見や差別をなくすよう十分な施策を求める会長声明」（https://www.f-bengoshikai.com/topics/t1/378.html）